

【主題】 子供が自ら学び進めることで地域への愛情を育む社会科授業

【副題】 第4学年「美しい景観を生かしたまちづくり～地域から愛される町 松島町～」を通して

【学校・団体名】 宮城教育大学附属小学校

【役職名・氏名】 教諭 鹿内 隆世

1. 主題設定の理由

第4学年の社会科の学習は、自分たちの都道府県について学ぶ内容が中心となっている。その中でも「県内の特色のある地域」について学ぶことは自分たちが住む都道府県を知る上で地理的環境の特色やその特色を生かした産業を直接的に学ぶことができる単元であると考えている。しかし、第3学年の自分たちが住む市町村について学ぶことに比べると、地理的なスケールが大きくなってしまい、前向きに学ぶことのできない子供がいるのも事実である。例えば、自分の住む市町村であれば、公共交通機関を用いて、比較的安易に足を運べるが、都道府県に地理的な範囲が広がると足を運ぶという点については難しくなってくる。さらに、自分たちの住む都道府県の特色とは言え、自分が住む地域の特色に当てはまるかというところではないことがほとんどである。このような自分の住んでいない地域について学ぶ際にも地域への愛情を育てていくためには子供が主体的に学び進めていくことが大切であると考えた。この実践では、「主体的に学ぶ」という子供の姿を「自ら学び進める」という姿であると考え、本主題「子供が自ら学び進めることで地域への愛情を育む社会科授業」と設定した。

2. 本小单元について

本小单元は第4学年「県内の特色のある地域」の単元の中で宮城県の地域の資源を保護・活用している地域を取り上げた。そして、「松島町」を教材として扱い、本小单元を「美しい景観を生かしたまちづくり ～地域から愛される町 松島町～」とした。子供がその地域（松島町）にゆかりがなかったとしても、社会科の学び方に価値を感じ、自ら学び進めることで自分たちがくらす宮城県の美しい町の一つであるという愛情を育てていきたいと考えた。

3. 子供が自ら学び進め、地域への愛情を育むための具体的な手立て

子供が自ら学び進め、地域への愛情を育むための具体的な手立てとして次の4点を講じた。

- ①「松島町」を教材として扱う価値の明確化
- ②子供が自ら学び進めるための単元構成の工夫
- ③学びの自覚化を促す「社会科だより」の活用
- ④子供の問いを生かした話し合い活動の設定

以上の4点を基に子供が自ら学び進め、地域への愛情を育む姿を引き出したいと考えた。

4. ①「松島町」を教材として扱う価値の明確化

本小单元のように「松島町」を教材として扱っている小单元は東京書籍「新しい社会4」（2020）のP158～P165に掲載されている。しかし、本小单元において私が「松島町」を教材として扱うことに決めたのは教科書に掲載されていることが理由ではなく、社会科の教材として価値があると考えたからである。

まず、社会科のよい教材における条件については豊田（2008）に詳しい。豊田は良い教材の条件として次の7つを挙げている。

- ①本質性…学問の研究成果に基づいた教材
- ②典型性…「教育内容」の基本的概念を具現する多くの事実を含む象徴的な教材
- ③具体性…子どもたちが直接目にしたり、想像力豊かにイメージできたりする教材
- ④意外性…子どもたちの既存の認識構造の変更・修正を迫るような教材
- ⑤適合性…子どもたちの実態に即している教材
- ⑥時事性…最新の情報に基づいて発掘された教材

「松島町」の教材研究を進めていく中で、「松島町」という教材はこの7つの条件の多くを満たしていると考えた。特に次の5つの条件については本教材においてより強く表出されていると考えた。

- ②典型性…学習指導要領において学ぶべき内容と合致する事実があること
- ③具体性…松島町にいる人と実際に出会ったり、インタビュー映像を通して多くの生の声を聞いたりできること

- ⑤適合性…松島町を訪れたことのない子供が学級に半数以上いること
- ⑥時事性…松島町において地域の資源（景観）をより生かすための社会実験が初めて行われたこと
- ⑦課題性…上記の社会実験には様々な課題が残されていること

このような点から「松島町」を教材として扱うことは子供が自ら学び進め、地域への愛情を育む姿を引き出すと考えた。

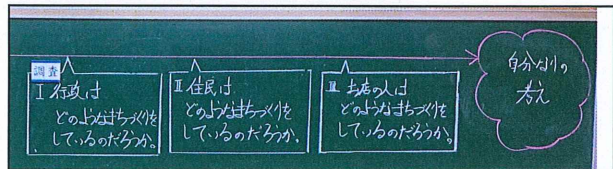
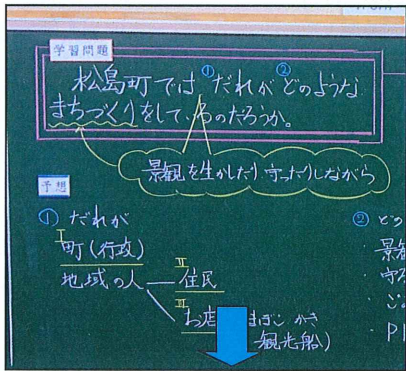
5. ②子供が自ら学び進めるための単元構成の工夫  
 私が本主題「子供が自ら学び進めることで地域への愛情を育む社会科授業」を実現するために大切だと考えたのは子供の思いを都度叶えていくことであると考えた。本小単元「美しい景観を生かしたまちづくり ～地域から愛される町 松島町～」について、子供が自ら学び進めることを仮定したときに考えられる子供の思いは「松島町の人に話を聞いてみたい」とであると考えた。そのために、本小単元の構成の中に松島町役場で働く方の話を聞いたり、質問したりする時間を数時間設定するとともに子供が調査をする中で疑問に思っ



たことは担任を通してメールなどで聞き、解決できるような単元構成を作成した。また、学習問題を立てる段階

や新たな問いを生む場面においても松島町役場で働く方の話や住民の方の話を起点にして学びを進めていくことで子供が自発的に追究活動に取り組めるようにした。さらに、学習問題を立てた後は学習問題に対する予想をすることでその後の追究活動の見通しを持てるようにした。そうすることで、その後の追究活動においては教師の指示がなくとも子供が自ら追究活動を進められるように工夫をした。小単元の終末段階では、松島町で初めて行われた景観をより生かすための「社会実験」の賛否を問う話し合い活動を位置付け、これまでに追究してきた松島町の様々な人の思いや取組、そして社会実験に対する考えなどを基に賛成と反対の立場に分かれて話し合うことで松島町の未来についても

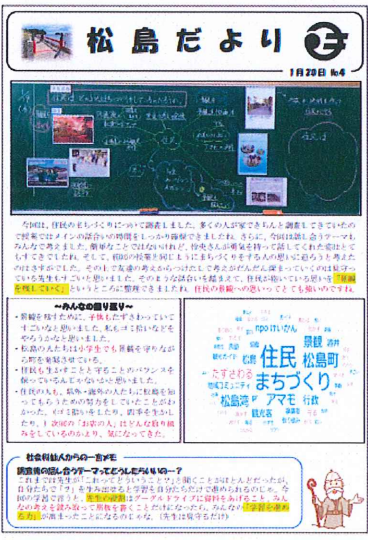
話し合えるようにした。そうすることで子供が追究活動において獲得した学びを基に自ら学び進め、地域への愛情を育むのではないかと考えた。



6. ③学びの自覚化を促す「社会科だより」の活用  
 子供が自ら学び進めるためには1単位時間において子供自身がどのようなことを学んだのか、周りの友達はどういうことを考えているのかということを見ながら学び、振り返っていくことが大切であると考えた。宗實（2023）も振り返りをする理由を次の3点に整理している。

- ①学びを深めるため
- ②学びに「つながり」を持たせるため
- ③自分の変容（成長）を自覚させるため

このような振り返りを繰り返していくことで「前回の調査ではこんなことが分かったから次は〇〇について調べよう」「立場が変わっても思いは変わらないのではないかな」「友達の振り返りを参考に今日は学びを振り



返ってみよう」などの思いが生まれ、次時の学びへの足掛かりになるのだと考える。そのために、本小単元では、1単位時間の学びや振り返りを社会科だよりに綴ってきた。

例えば、このお便りには板書と共に子供の振り返りについても掲載している。そこには次のように書かれている。

住民の人も、県外・海外の人たちに松島を知ってもらうための努力をしていたことがわかった。(ゴミ拾いをしたり、四季を生かしたり。) 次回の「お店の人」はどんな取り組みをしているのかより、気になってきた。

この振り返りの「住民の人『も』」という言葉に注目すると前時までに学んだことも踏まえて、振り返りを書いていることが分かる。また、次時の学びの見通しについても立っていることから「自ら学び進める子供の姿」が表出されている振り返りなのではないかと考える。さらに、この振り返りを「社会科だより」に掲載したことでこの振り返りを読んだ子供たちにとっても一定の学びがあるのではないかと考える。その後の振り返りでは別の子供がこのような振り返りを記述していた。

お店の人も松島の景観を守る・生かすまちづくりをしている。

このような学びをお便りでお知らせをしなければ教師が振り返りの仕方について指導していたかもしれないが、「社会科だより」を発行していたことにより、子供が子供の力で自ら学び進めることができたのではないかと考える。

#### 7. ④子供の問いを生かした話し合い活動の設定

本小单元では、子供が追究を進める段階と終末段階において子供の問いを生かした話し合い活動を設定した。本段では、二つに分けて記述していく。

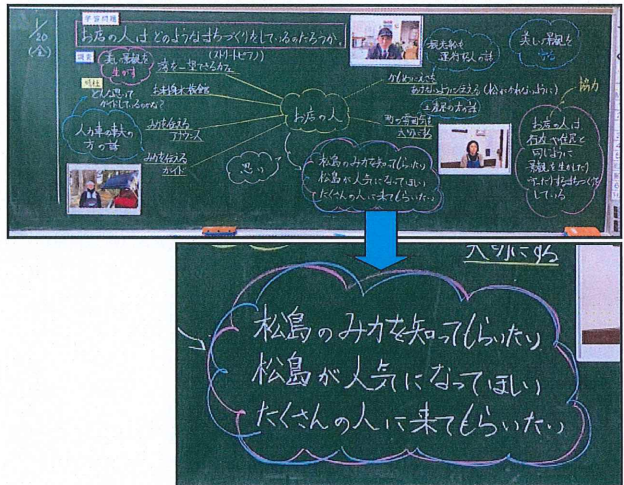
##### (1) 子供が追究を進める段階での話し合い活動

追究を進める段階では、一単位時間を次のような流れで学び進めた。

本時の課題の確認 (3分) → 個別の調査時間 (25分) → 子供の問いを生かした話し合い活動 (12分) → 振り返り (5分)

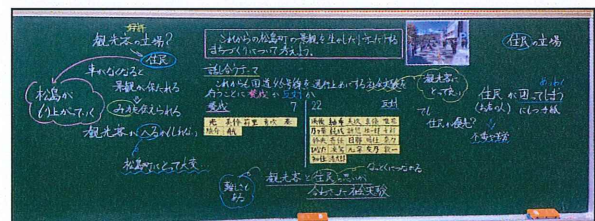
個別の調査時間を終えた後に「調査したことを基に話し合ってみたいことはあるか」と問い掛け、その都度話し合う内容について確認した。追究を進める段階では、どの時間でも「人の思い」について話し合いたいという声が挙がり、調査したこと(景観を生かす・

守る取組) からどのような思いで取り組んでいるのかということについて話し合った。追究を進める段階では、「町」「住民」「観光業に関わる人」の3つの立場について調査を行ったが、子供はどの時間でも「松島の魅力を知ってもらいたい」という思いを持っているのではないかと考えていた。また、どの時間でも「人の思い」について考えたことで松島町に関わる人々の地域への愛情を感じることができ、子供たち自身も「松島に行ってみたい」「まちづくりについてもっと知りたい」などの思いを強くすることができた。



##### (2) 終末段階での話し合い活動

子供はそれまでの調査で「松島町の人々は同じ思いを持ち、協力してまちづくりをしている」ということを概念として獲得していた。しかし、松島町役場の方の話から「社会実験」の際にはうまく協力できなかったことを知り、社会実験について更に調べていこうと考えるなど、松島町の人のお話を起点に学び出していた。その後、これまでに調査した内容に加え、地域住民の方の社会実験に対する考えに出会うことでこれからの松島町について話し合ってみようという声が挙がったため、終末段階で「これからも国道45号線を通り止めにする社会実験を行うことに賛成か、反対か」というテーマで話し合った。社会実験に対して賛成と考えた子供も反対と考えた子供もそれまでの調査で育んだ松島町への愛情から真剣に意見を話す子供が多く、友達の話をよく聞くことで自分の考えについても改めて考える子供の姿も見られた。



この二つの話合いから、子供がその町に住む人々の姿や声から問いを見だし、その問いについて話し合うことは子供が自ら学び進めるための原動力になることに加え、その地域への愛情を高めるための手立ての一つになり得ると考えた。

#### 8. 成果と課題

本実践において、4つの手立てを講じたことで「子供が自ら学び進め、地域への愛情を育む」子供の姿を多く見ることができた。本小単元は自分たちが住んでいない「松島町」を教材として扱ったが、追究活動を重ねたり、自分たちの問いで話し合ったりすることで徐々に「松島町」への愛情を高めていくことができた。本実践の終末段階の子供のまとめから成果を考察していく。

- ・観光客と行政だけを考えるのではなく、住民や生活するのに大切なもの、人のことも考えることが大切だと思いました。
- ・住民と観光客のことを考えて、立場を変えながらまちづくりをすることが大切だと思います。

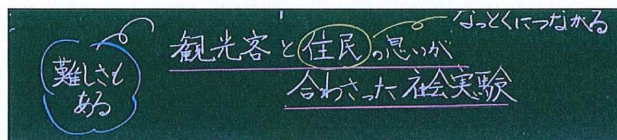
このように様々な立場を想起したまとめが多く書かれていた。自分が住んでいなかったとしてもより良いまちづくりを願っている姿は地域への愛情を育んだ結果なのではないかと考える。また、「自ら学び進めること」「地域への愛情を育むこと」のどちらにもより有効だった手立てとして「単元構成の工夫」が挙げられる。本小単元では、人と出会ったり、生の声を聞いたりする場面を多く設定した。そうすることで「松島町」に住んでいる人の思いや温かさに直接触れることができ、事実の裏に隠れる「人」に目を向けることができた。このようなことが「自分たちに考えられることはないか」「この取組はどうなっているのだろう」という自ら学びを進める原動力につながると共に地域への愛情を育むきっかけになったと考える。

その反面、子供たちの学びがそこに住む人々が当たり前に取り組んでいるであろうことに留まってしまったことは課題だと考えている。本学級の子供の多くは次のようなまとめを記述した。

住民の意見と観光客の意見がどちらも実現できるようにバランスをとることが大切である。

このようなまとめは松島町の様々な人の立場に立つて考えられたものではあるが、すでに考えながらまち

づくりに取り組んでいるに違いない。実際に終末段階の話合いの時間では「バランスを取ることは大切だけど、それは簡単なことではない」という声も聞こえた。子供たちが自ら学び進めることは地域への愛情を育むことにつながる反面、社会科の学びとしてはごく一般的な「当たり前のこと」を学ぶということに留まってしまうこともあるのだということが分かった。



このようなことを解決するために、「教師の役割」についても考えていかなければならないと感じている。子供が自ら学び進めることには価値があるが、その学びをより深いものにしていくためには教師の働き掛けが重要である。今回の場合であれば、「これまでの松島町の人たちはバランスの良いまちづくりを考えてこなかったのかな」と問い掛けても良いだろう。教師も同じ学級の仲間として問いを生み出したり、追究活動に取り組んだりすることは子供の学びを深めるためには非常に大切である。本実践のように子供が「自ら学び進める」ための単元構成の工夫や資料づくりなどは今後も取り組んでいきたいが、子供の姿を見守るだけでなく、いざという時には教師も一緒になって学びを深めていきたい。そして、子供と力を合わせて深い学びを生み出していけるような教師でありたいと強く感じている。

#### 【引用・参考文献】

- ・文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示社会編) 日本文教出版
- ・東京書籍 (2015) 『新しい社会 4』東京書籍
- ・豊田憲一郎 (2008) 『小学校社会科教育に関する一考察Ⅱ－教材の視点から－』九州ルーテル学院大学紀要 VISIO, 第 37 号
- ・長瀬拓也 (2021) 『社会科でまちを育てる』東洋館出版社
- ・佐藤正寿 (監) 宗實直樹 (編) 石本周作 中村祐哉 近江祐一 (2022) 『社会科教材研究の追究』東洋館出版社
- ・宗實直樹 (2021) 『宗實直樹の社会科授業デザイン』東洋館出版社
- ・宗實直樹 (2023) 『社会科「個別最適な学び」授業デザイン 理論編』東洋館出版社